



### 5-1-2 直接定着方式(図 5-4 参照)

従来のアンカーフレームを用いた定着構造とは異なり、スタッドを併用した異形棒鋼をフーチングコンクリートに直接埋め込むことにより定着する方式で設計する。形状保持を目的とした部材を配置する。

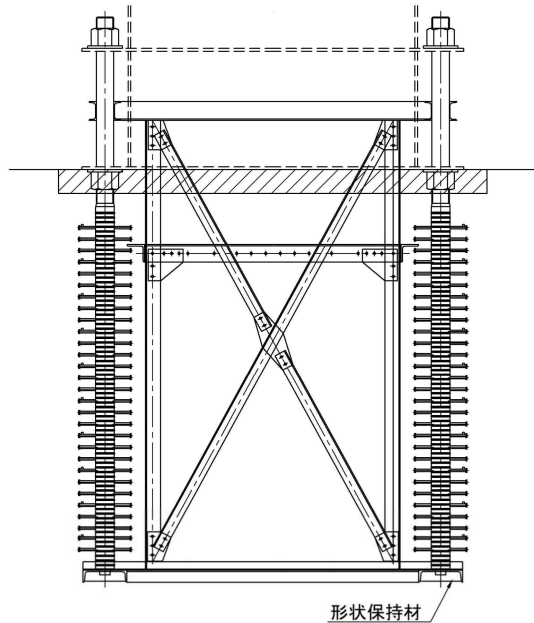


図 5-4

### 5-2 アンカー部の基本寸法

アンカーボルトの配置は、脚柱の外側より 200～250mm 程度とする。アンカーフレームやアンカーボルトが、フーチング上下面鉄筋、杭頭鉄筋などと干渉しないように基本寸法を決定する。

逆に、フーチングなど基礎の設計や作図にあたっては、橋脚アンカーとの関係に注意し、基礎の誤差や基礎鉄筋を予め分割しておくなど、アンカーフレームの施工に十分配慮した構造が望まれる(図 5-5 参照)。

#### 5-2-1 アンカーフレーム方式

アンカーフレームの高さ(アンカービームの上下間隔)は、現場での作業性を考慮して 1000mm を最低間隔とする。フーチングコンクリートの押抜き・引抜きせん断の照査を行い、100mm 単位でビーム間隔を検討し決定する。

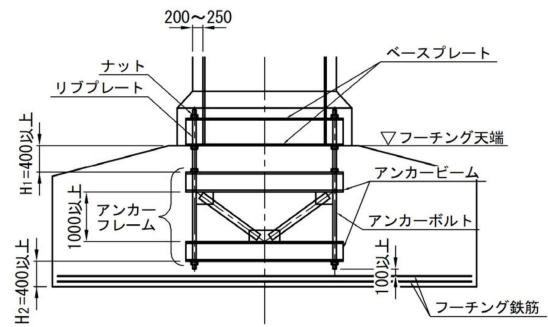


図 5-5

#### 5-2-2 直接定着方式

アンカーボルトの設計埋込み長は、その付着強度によって決定される。実埋込み長は、フーチング下面から 300～500mm まで伸ばし、範囲は鉄筋との取り合い及び施工性を考慮して適切に決定する(図 5-6 参照)。

また、各高速道路会社によっては、使用するアンカーボルト径の上限値、及び材質の上限を規定している場合があるので注意を要する。

誤 : 300～500以上  
正 : 300～500

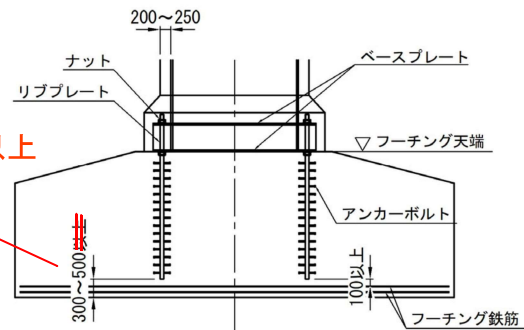


図 5-6

#### 5-3 アンカービームの基本寸法と溶接

アンカービームの腹板高は 300～500mm 程度とする。腹板間隔及びダイアフラム・リブプレートの純間隔は、アンカーボルト軸径に余裕量を考慮して決定する(図 5-7 参照)。アンカービームの溶接については、ビームの機能保持と共に、施工性を配慮する必要がある(図 5-8 参照)。アンカービームのフランジ板厚は、梁作用の応力度と版作用の応力度の重ね合わせで決定する。腹板及びダイアフラムの板厚は、アンカーボルト軸力による圧縮応力度及びせん断応力度で決定されるが、ダイアフラムの板厚が腹板厚より極端に薄くならないよう注意する。また、ダイアフラムの分担力を腹板に伝達できるように溶接部の応力照査を行う必要がある。